

# せい と みち 聖徒の道



1969年1月号

こどものため

## 友だちをつくったソロバン

ゲイリー・ドーター



「今度の新しい学校では、最初の日はいい子にしていなければいけませんよ」ユー・タンのお母さんはいいました。ユー・タンは、自分の両手を見てもらうためにあげると、お母さんに自分の耳をのぞきませました。お母さんは、彼にペンと紙をわたしながら、にっこりしました。ユー・タンは小さなそろばんを取り出しました。それはチュー・リーおじさんが、ユー・タンと家族がアメリカに来る時にくれた物でした。「新しい国で、これは君の魔法になるよ、そして、きっとこれが新しいお友達を作ってくれるよ」とおじさんはユー・タンに言っていました。ユー・タンは学校に近づくにつれて、とても心配になってきました。他の子たちが、自分を好きになってくれて、仲良くしてくれたらなあと思いました。「もし君が親切にすれば、人もきっと君に親切にしてくれるよ」と、今朝、お父さんはいっていました。ちょうどユー・タンが学校にむかって歩きはじめたときに、彼と同じくらいの大きさの金髪の少年が、フットボールのボールをとるため

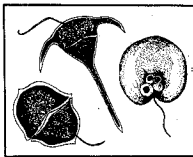
に走ってきました。彼は、ユー・タンにすごいスピードでぶつかったので2人も大の字に倒れてしまいました。その少年は立ち上ると「ごめんなさい、君だいじょうぶかい?」といました。「お早よう、ぼくはだいじょうぶだよ」とユー・タンは洋服のどろをはらいながら答えました。「ぼくはトミー・ハッチャー」とその少年はにこっとわらってユー・タンの紙をひろうのを手つだいました。「君は、ここへは初めて?」「うん、今日が初めてなんだよ」そろばんをひろいながら、ユー・タンは答えました。「僕の名前は、ユー・タンです」「ねえ、それなあに?」とトミーはそろばんを指さしました。「これはぼくのそろばんだよ」とユー・タンはいいました。ユー・タンには、トミーがなぜそろばんを知らないのかわかりませんでした。「何に使うの?」「算数の問題をとく時にき」とユー・タンはいいながら、トミーが自分のことを、かかっているのかと思いました。トミーは笑って「君は子供なんだね、何年生に入るの?」「お父さんは、5年生に入っていました」とユー・タンはていねいにいいました。それはとてもユー・タンをまごつかせました。なぜなら、香港では学年生がなく、年齢によって別かれていなかったからでした。「ぼくもだよ。いっしょに来たまえ、ぼくたちの教室まで案内してあげるよ」と、トミーはにやっと笑いました。「ありがとう」それからトミーは「それにぼくは、君が計算をそれでするといったらウィルソン先生が、どんな顔をするか見たいしね」と笑いながらいいました。トミーは、ユー・タンを連れて長い廊下をわたっていきました。「ここがぼくたちの部屋だよ」、トミーは、戸を開けると、ユー・タンを前の方へつれてゆき「ウィルソン先生

新入生のユー・タン君です」ウィルソン先生はユー・タンにわらいかけながら「まあはじめまして」ちょうどその時、ベルがなって、男の子や女の子たちが、ガヤガヤと戸びらの方へいきかけました。「皆さん、静かに席について下さい。新しい生徒を紹介しますから」誰もが、ユー・タンをみて親しそうに、笑いました。ユー・タンは部屋の前の方へ立って、とてもはずかしいと思いました。「こちらはユー・タン君です彼は、中国から来ました」先生は、ユー・タンの方をみて笑いながら、「あなたはきっと、私達と仲良くなれると思うわ、それに、中国について何かおもしろい事をきけるわね」その朝は、ユー・タンにとって無事にうまくゆきました。だんだんとみんなになれてゆくの、自分でも感じました。そして、いつでも誰かが笑いかけるとすぐに自分の方からも、ほほえみ返しました。お父さんのいった事は、正しかったわけです。だれもが、とても親切そうでした。休み時間には、みんなはユー・タンのまわりにあつまって、いろいろな、質問をしました。そして、ユー・タンに「フォー・スクエア」(ボール遊び)のしかたを教えてあげました。休み時間がおわるとすぐに、ウィルソン先生は「計算の時間ですよ」といいました。生徒達は机の中から本をとりだしました。ユー・タンは机の上にそろばんをおいて顔をあげると、トミーが彼の方をみて、にやにやしていました。ユー・タンは、なぜトミーがそろばんをとりださないのかふしぎでした。しかし、トミーに笑いかえしただけですぐにウィルソン先生の方を見ました。先生は黒板に「 $2679 \times 86$ 」という問題を書いていました。ユー・タンはその問題を、とてもはやくやってしまい、ウィルソン先生がふりかえると、手を上げ

ました。「はい、ユー・タン」「答えは、230,394です。」ウィルソン先生は少しびっくりした様な顔をしました。「まあ、その通りよ、だけど、どうしてそんなに早く計算したの？」ユータンはそろばんを上にあげながら、うれしそうに笑いました。「ねえ、ユー・タン、ここではそれは使わないのよ」とウィルソン先生はいいました。トミーが笑い出すと、他の生徒達も一緒に、どっと笑い出しました。ユータンはとてもまどついてしまいました。それから、みんなが自分のことを笑っているのだと思いました。そろばんをひったくると、部屋からかけ出して行きました。「待ってちょうだい、ユー・タン」とウィルソン先生が呼び止めました。しかし、ユー・タンは建物から、かけ出して行き、安心できる場所へつくまで、足をおそめることをしませんでした。お母さんは、彼が入ってくるとびっくりして「ユー・タン、もう学校は終わったの」と聞きました。彼は泣きたくなったけど、お母さんの前で泣くには自分は大きすぎると思いました。「あんな学校にもどるのなんかいやだよ」と大声でさけぶと自分の部屋へ走って行きました。お母さんはドアをたたきながら「ユー・タン、それはどういうこと、なにがあったの」「お母さん、ひどいよ、みんながぼくのこと笑うんだ。それに先生までも笑うんだよ」とユータンはお母さんにあったこと全部を話しました。「それは、ただのごかいだと思えますよ」となぐさめながら「あず、お母さんがいっしょに学校にいて、先生にお話してみますからね、すべて、うまくゆきますよ」とお母さんはいいました。その日の午後、おそくなってから、ドアをたたき人がありました。ユー・タンがドアを開けるとウィルソン先生とトミーがそこに立って

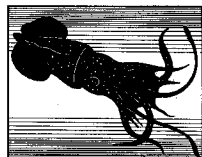
ました。「ユー・タン入ってもいいかしら」とウィルソン先生が聞きました。ユー・タンは2人にていねいにしなければいけないと思ったので「どうぞ、お入りください。お母さんをお呼びに来ます」といって、ウィルソン先生とトミーをお母さんに紹介しました。「ユー・タン、私達2人とも、あなたにあやまらなければと思っているのよ。そろばんを使ったのをちっともおこってないのよ、よく考えもしないで、それをいったことを自分でもあきれているの」とウィルソン先生はいいました。「僕もごめんね、君がそろばんで問題をとくのがおかしかったんだと思うよ」とトミーもいいました。ユー・タンの目を見つめて「だけど、そうじゃないんだ、ユー・タン。君の気持をきずつけるつもりはなかったんだ……ぼく達お友達になれたらなあ」ユー・タンはおじぎをして「ぼくも悪かったんです。お母さんが、それはただのごかいだといっていますけれど、その通りですね、ぼくも君とお友達になれたら、とてもうれしいよ」「ところでユー・タン、私から一つお願いがあるのだけど」とウィルソン先生はいいました。「あなたの同級生は皆、ほとんどそろばんを見たことがないのよ。みんな、あなたが、あまり早くそろばんを使うのでびっくりして笑ったのよ。どうゆうふうにするのか、あず、そのそろばんを学校に持ってきて教えてくれないかしら」「そうだったら、とてもうれしいなあ」とユー・タンはにっこりしました。

チュー・リーおじさんのいった通りだ。ぼくのそろばんがお友達をつくるのを手づかってくれたんだ。と考えると、ユー・タンはもう一度ほほえみました。

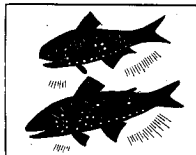


1

## うみのふしぎ

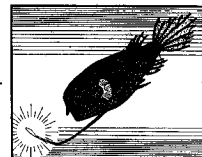


3



2

ジョアン アンドレ ポーター



4

「海の深いところで、光をだすものたち」みなさんが大きなたいようこうろせん（太洋航路線）にのって海をこうかいているとかんがえてごらんさない。夜もだいふふけて、空も海もまっくらです。

とつぜん、まっかな光が海いちめん、なんキロもひろがります。またあるときは、まるで天から星がおちてきたかのように海のひょうめんが、青いひばなをきらめかせることがあります。そして、まもなくその船はまっすぐに、たくさんのかやく光のかたまりの中すすんでいくように思えます。じっさい、みなさんがながめるところはほとんどどこでも、つなや板ぎれや、雲や白、青、緑にかがやくかじなどがみえるでしょう。この、海の水の中でうずをまいている、びっくりするような光は、みなさんがその光で本をよむことができるほどあかるいのです。

この海のふしぎは、おとぎばなしではなくて本当のことなのです。では、この水のふしぎについてせつめいをしましょう。

何千何万という海のいきものたちは、じぶんの体のなかに光を作りだすことができるのです。そのどうぶつたちの体の中にある、あるものと、海の水のなかにあるさんそとがむすびついたときに、光がでるのです。りにすすんでいるほたるも、おなじようにして光をだしています。ふしぎなことにはたるのひかりも、海のいきもの光も

あんなに光っているのに、まったくつめたいのですよ！

海のふかいところにすんでいて、光をだしているものの中で、いちばん小さいのがダイノスです。ダイノスはとても小さいので、何百万とあつまって光っている時でなければ、けんびきょうなしで見ることが出来ません。ダイノスがあつまって、光る時には、まるで光のくものようになってあらわれます。全部のダイノスの体からは小さなべんが出ていて、およぐのを助けます。いろいろな形をしたダイノスがありますがその中の3つのかたをここに出してみました。

（えの1）あるダイノスはゆめのようにつくしい貝がらを身につけていますが、なにも身につけていないダイノスもいます。

ダイノスには、光をつくりだす力とおなじように、もう一つふしぎなことがあります。それは、ダイノスがしょくぶつであるのか、またはどうぶつであるのかをかがく者たちが決められないでいるということです。ダイノスはどっちつかずのおかしないきものということができるとでしょう。しょくぶつとおなじようにダイノスもおひさまの光と水をたべ物にしています。けれどもどうぶつのように、ほかの海のしょくぶつをもたべるのです。

海のもっとふかいところのあちらこちらに「ちょうちんうお」とよばれている魚がすいすいとおよいでいます。（えの2）

この8センチほどのきれいなお魚たちは

7月4日のどくりつきねん日をおいおいしているのでしょうか？ みなさんは「ちょうちんうお」の花火のはなやかなショーからそんなことをかんがえたかもしれませんね。「ちょうちんうお」は自分の体にずらっとならんでついている、光のボタンのれつをとくべつなやりかたで光らせることができるのです。このとてもふしぎなくみは、はんしゃきょうがついているちょうちんにどこか、にています。「ちょうちんうお」は自分たちの本当のなまを見つけてたしかめるために光を出しているのかもしれませんが。たぶん何人かのせんもんかが考えているように、かれらはおいしいお食事をするために、他の海のどうぶつをひきつけようとして、自分の光を使うこともあるのでしょうか。光をいっぱいにかがやかせた「ちょうちんうお」といったら、まったく胸がどきどきするようなながめです。しかもたくさんの「ちょうちんうお」は光っていないときでもとてもきれいです。かれらの体の色は、銅、銀、こい青、おまけにピンクや緑色までついていて、そのきれいな色がきらきらとかすかに光っているのです。いかはたしかにきれいないきものではありません（えの3）。10本ものくねくねした長いうでをもっているので、いかを見たほかの海のいきものたちはびっくりしてしまふにちがひありません。海の深いところにすんでいるたくさんのいかはとてもとても大きくなります。いままでにみつかった物の中でいちばん大きいのは1メートル70センチもありました。いかはほとんどのばあい、とても早くおよげるおかげできけんから身をまもっています。

早くおよがない時にはしょっかくからインクのようなえきたいのえんまくをはきだしてにげるというやりかたもあります。あるいかは、てきをめくらにし、おどろかせ

こんらんさせてしまうほど、まっかに光るえきたいを出すこともできます。

そんなに、早くおよぐことができない、のろまないかは、光を出すしかけたよらなければ、きびしい海の世界で生きていくことができません。えものをみつげようとしてせかせかとおよぎまわるかわりに、のろまないかたちはきれいで、あんせんで、すみごちのいい「やすみば」をみつけます。それから、光を出してまちます。まもなくたくさんの小さな海のいきものたちがこの光にこうきしんをそられて、何がおこるのかを見ようとおよできます。

さあ、これでなまけものいかささんたちのお食事のよういできました！

この太った、小さな魚の体につりざおがあるのでしょうか？（えの4）

ええ、本当についているんですよ。つりざおが体からはえているだけではなく、その先に光るにせのえさがついているのです。この魚が「きかなつりをするさかな」（ちょうちんあんこう）とよばれるのもあたりまえですね。なぜってちょうちんあんこうは本当に他のおさかなをつる魚なのです。ゆれてかがやいている光のえさは他の魚がくいつきたくなるようにさそっています。ほかの魚たちはそれがおいしいごちそうだとおもうのです。ちょうちんあんこうのほかのしゅるいのはとても大いなので、自分よりもっと大きい魚のみこんでしまいます。ある形のは海のひょうめんから、海がもをがつがつたべてしまうことでもいられています。世界中の大きな海の深いところにすんでいる、光をだすものたちやそのほかにたくさんの、こえびやくらげやみみずなどが、海でのせいかつを、おもしろくて、みりょくてきて、光かがやくふしぎなものにしているのです。

# ちょうちょどろぼうのひみつ



## これまでのあらすじ

3人の若者達、ダニー、パット、パムは博物館からちょうちょのコレクションを盗まれたアルブライト氏が本当は、悪者だったという事実を発見しました。またアルブライト氏の30万ドルがなくなっていたこともわかりました。新聞の切り抜き記事にはアルブライト氏は階段から落ちて死んでいった、そしてそれは事故ではなかったということ伝えていました。アルブライト氏が死ぬ前にいったモルフォという名前が、かげの共犯者でちょうちょどろぼうかもしれないのです。アルブライト氏の家に入る機会を得るために、若者達は不動産の代理店をしているパムとパットのお父さんに頼んで窓を洗ったり、家具のほこりを払ったりするために、アルブライトの家に入るのを許してもらいました。となりに住んでいるベントン氏は、3人を家に入れると、部屋から部屋へとずつついてまわりました。3人はベントン氏にモルフォのことをきい

## 再び事件発生!

ミュレイ・T. プリングル作  
チャールズ・キルター 絵

たけれども、何も知らないという返事が返ってくるだけでした。書斎には、アルブライト氏の書いた豪華な青いちょうちょの絵がありました。

## 第四章 再び事件発生

その後数日は、何事もなく過ぎて行きました。ちょうちょどろぼうに関しては、何も情報がなく、警察も誰をつかまえたとも発表しませんでした。これはおそらく、警察が何も新しい事を見つけていないことを意味していました。ある意味で、ダニーは博物館での仕事に熱中できたので、よろこんでいました。彼はいっしょうけん命に働きました。その結果、ダニーは、なん百ものちょうちょを標本にする準備をしました。「ダニー、こっちへ来て、箱をいくつか動かすを手伝ってくれないかなあ」と館長がいました。

「ええ、いいですよ」とダニーは椅子の背にかけて置いた上着をとるために、手をのばしながらいました。カーステアー博士は、毎日配達されている午後の新聞をひろうためにホールのはしの小さなテーブルのそばで、立ちどまりました。見出しをじっと見みつめると彼は顔をまっさおにして

「やれやれ、また起きたね」と息をはずませました。

ダニーが新聞に目を通すと、第一面に太い黒々とした見出しで、「ちょうちょどろぼう クレステビューに現われる」と書いてありました。「きっと、この博物館のちょうちょを盗んだのと同じどろぼうに違いない」とダニーが叫びました。カーステアー氏はむっつりとして、うなづきました「読んでくれないか、めがねを持ってないもんでね」ダニーは大きな声で読みました。それには、簡単に次のように報じていました「その朝、クレステビュー博物館が開かれるとまもなく、黒いフードをかぶった一人の男が事務所に入ってきて、事務員にピストルをつきつけました。はっきりしないが、うなるような声で、そのどろぼうは、アルブライト氏の収集品のちょうちょ全部を要求しました。女性達が、おさいふを出し、男性が私入れを取り出すとどろぼうは荒々しく首をふって「お金は自分で持っている、アルブライトのちょうちょが欲しいんだ」と、かみつくようにいいました。ちょうちょが、どろぼうに手渡されると、覆面をしたどろぼうは、博物館の館員を地下室にとじこめて、ドアにカギをかけ、変った品物をとって逃げて行きました。「記事はこれで全部ですよ」とダニーは読み終えました。「ねえ君、そのどろぼうはきっと向う見ずな性格に違いないね、なぜこの博物館でやった様に、夜にこっそり忍び込まなかったのか不思議だなあ」「クレステビューはここよりも、もっと近代的な設備だし警備もよくできているよ。どろぼうよけの警報器が故障しないかぎり、どろぼうは建物の中に入れなかったと思うよ。ちょっとどろぼうがまたここに来るんじゃないかと思うとこわいよ。そして、今ではもうそのどろぼうは、人をピストルでおどしにかか

っているし、アルブライト氏のちょうちょに何か人をそんな行動にさそうようなところがあるのだろうか、やれやれ……」まきにつぎの日、まだ誰もがクレステビュー博物館の大胆な昼間のどろぼうについてさかんに、話している間に、不可解なその事件は新たな進展を見せていました。ブリクストン博物館の盗難で盗まれたちょうちょは再びその姿をあらわしたのです。ちょうちょは町のごみ捨て場のごみ入れのいたるところから発見されました。署長のマーチン氏は、カーステアーズ氏に電話して、それを知らせました。つけ加えて「うちの署員が、手掛りを調べた後で、発見されたちょうちょをお持ちいたしましょう。かなり形がくずれてしまったのがありますけど、たぶん、何か助けになると思いますよ」といいました。「署長、そりゃいい話だね、ぜひさがしてもらいたいね、それによって事件を引き起した犯人を見つける方法がわかるだけでもいいと思っているんだよ」とカーステアーズ博士が答えました。「私もそう思いますけど、卒直に申しあげますとどうもあぶないようです。我々のあつまっているこのどろぼうは、かなり悪がしいようですからね」と署長は答えました。ダニーは、その場に居合わせなかったのに、事件の最新の進展を知りませんでした。彼はその日は、出かけていました。パット、パム、ダニーの3人がサイクリングからもどって、ブリクストンの近くに来た時、パットが「君は、博物館に寄るつもりかい」と聞きました。ダニーはうなづいて「した方がいいと思うんだ、とにかく、あそこまで行ってみなくちゃ、カーステアーズ氏がきっとぼくにたのみたい事があると思うんだ」「まだ早いんじゃない。ちょうちょの仕事が続けられると思うの」とパムがいった。「そうだ、今思いついたんだけど、ダ

ニー、ぼくたちが手伝わたらどうかなあ、もしできれば、カーステアーズ氏に聞いてみるってんだけど」とパットがいうと、「忘れてたよ。だけど、今これから聞いてみるよ」とダニーはあやまりました。3人が博物館の見えるところまでくると、パットが突然騒ぎました。「ねえ、見て警察の車があるよ」「わあ、特別な事でもなければいいけどなあ」とダニーがいいました。「きつといい知らせよ、ちょうちょどろぼうがつかまって、犯行現場に犯人をつれもどしに来たのに違いないわよ」とパムがいいました。3人の若いそうきはんが、博物館の入口でブレーキをかけて止まると、マーチン署長とカーステアーズ博士が、3人にあいさつしました。ダニーが何事が起ったのかを聞くと、盗まれたちょうちょが見つかったと聞かされました。ダニーは何をいってよいのかわかりませんでした。彼には、想像も出来ない事でした。この事件は、ただごとではなく、不思議な謎につつまれていました。カーステアーズ博士、マーチン署長、それに3人は立って、警官が車の後のトランクから、ごみ入れを取り出すのを見つめていました。カーステアーズ博士は、不満そうに「恥しいことだ、何んで、すてるためにちょうちょを盗んだりするんだらう、全く意味がわからん」とぶつぶついいました。「うちの署員に、ちょうちょの手がかりを調べさせているのが、ばからしいですよ」と署長がいいました。何か、他にもわかりましたか」とダニーは熱心に話の中に入って行きました。マーチン署長は、首をふって、「いいや、だけど、これを見つけたんだよ」とポケットから封筒を取り出して、手を入れて中味を出しました。それは、前は、乳白色のちょうちょでしたが、今は、そんな物には見えませんでした。「どうしたんですかこれは、焼いた

みたいになっちゃってますよ」「その通りなんだ、実際、そのごみ入れの中の白や黄や明るい色のちょうちょにはすべて、羽にしろしがついているし、その中のいくつかはこんなふうに、焼けて、カリカリになっているんですよ、だけど黒っぽいちょうちょには手もふれてないんですよ。それがわかりますか」とマーチン署長はうなづきながらいいました。カーステアーズ博士は、どうしようもないという様に、首を振って「まったく、こんなことは理解に苦しむよ」といいました。事務所でダニーは、くずかごを仕事机の横において、注意深く、乳白色の羽が、こげてさび色になっているのをみつけるまで、中味を取り出して調べましたなぜ、ちょうちょを焼きたがるんだらうかなぜ明るい色のだけが焼かれて、黒いのは焼かれないのかな、それにシャベルでストープに入れるほど、ごみ入れの中に捨てるために、ちょうちょを集めたんだらうか。

ダニーはそこに座ってこげたちょうちょを見つめました。ダニーの頭は、答えのわからない質問でいっぱいになって、くらくらしてしまいました。マーチン署長がどんなにみじめか、彼にはよく解りました。とにかく、ちょうちょはもどったし、中にはダメにならないですむのものもあるだらう。クレスレビューのふく面どろぼうが盗んだちょうちょも、同じように見つかるかな？同じように、焼かれてるんだらうか、もしそうだとすれば、なぜだらう。

ダニーは大きな声でうなりました。ちょうちょはもどったけれど、なぜが解けるかわりに、さらに頭を悩ますなぞとなっただけでした。

(つづ)

